鬼神論

下冊

洋学文庫
文庫8
C129
2

主
高兼

ISIKAWA: ROERDAT BOEKTOEBEHOORT

鬼神論下

筑後守從五位下源君美著

きゝはまゝ夫子乃怪を語り中庸に見るゝ長生の
理をあゝけるたゝ変化の理りとゝもたゝ聖人
ら所聖人乃知もゝ中ゝ庸ゝとゝたゝゝ
ゝる為ゝ易ゝ知ゝ物ゝ周ゝ道天下を
所ゝゝゝん作ゝ知すゝゝ方あゝゝ行ゝい
で物化の変ゝゝ世ゝゝゝむゝの雅ゝのゝゝ
慶ゝ詩書執禮ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
と仁ゝかゝゝゝ行ゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝの雅ゝ宮ゝゝゝゝゝ匹夫匹婦ゝ

41- 6928

ものにらくすることを慶賀しくて祈りて宮ひかりを
ものとなりさる所をいとゆる今乃島にあに後年
こぐらちなんものあかこと聖人のよく人をみ
ちひきまうふ慶みてすれいちこと道天下をすくふ
まうふ所なるへしむう神福の御世九州の金銀
九牧にして九牧八九州乃名なり九州乃島を鎖ちまひしに山川
奇怪百物を図しに治ひ人をして祈禱をもちまく
うの宮ならんまうしめて其祥を定めまひ夫は
まうに李氏の年をうがりて土の金の中に羊乃
有るを掘出して図にまうせしに木石の怪を蘖

蝗蝻水乃怪を龍図象土の怪を羶羊とちうしまひ
まうに高年舞として大ふみ玉へき事を齊の使
ふ答ん中まうしに類のことをこと聖人の知まうん
わるあるまの荷丸一足の鳥舞ことの行ゆを京に使しまく夫まう
きまうのうに成ことく家語にたんうう詩書物語の法わるのまうひまく
みはあるに世なりて山海を法をまうひまく事をあり
しとれてみへうわ松ちうんまう山海神異等の經搜神述異等
の記のちまかの怪を法るの書世にまうに或を
疑へく或を信へてよまくこれらの山川乃怪百物
木石水土乃怪をすぐへうに陰山陽くふ暗く若来生

ちげきるふ屢そ日月乃出入を相とゝふぎ陰陽出
の事あめつちら毒〳〵く百の怪を生ずるこゝいつゆる蒸
〳〵て菌を生ずるなり〳〵（この船荷ふてゝ有り今も毒虫の
叶ふてゝびらえくゝ生ずるものゝうち神禍
ちゝ怪らのもの紙幅〳〵たまひ〳〵そ人その宮ゝ所ゝ乃
じ〳〵幅の所はゝ〳〵ゑあるに人あるひ人ちゝ乃
類〳〵若〳〵ゝ〳〵ゝるゝ人あり〳〵ゝらゝを生ぐる事
ヨとゝ〳〵すゝヨらぐゝるゝ生ずる所ちゝ屢毒晋の温嶠ぶ牛
渚ゝ毎ゝ〳〵ゝ〳〵ゝらの屢水ゝ〳〵ゝ族あ
ゝるゝゝゝゝゝゝ屢を燃〳〵ゝらすゝゝ
のゝゝ〳〵ゝ族水ゝうゝゝ出〳〵ゝあげゝゝゝの族

の婆ゝ人ゝゝゝ巫明道ゝおゝゝゝゝゝ
相ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ居ゝゝ所ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
家時ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
人鬼の怪ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
此陳蔡の間ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の長ゝ九尺ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

の人を動かしむ子貢すゝみていふにあんなまよそものゝごと
いふ處を聞もあへず握手はまくり子路たゞちに
ろに庭に行向ひしらずはらかふて勝負あらんとかまへ居
たる彼夫子さしのぞき見んとまへにあまりて彼の男をはつ
かまへ乃間にあつまりて聞へひびきあれば不意なりと
みてしりはらのおもてをひらかせて忽ちひよよせ
とびあがりて上にあがりしへ降ひれ子路
よろ浮すてゝんでおしぬすむ枝をとらへ大きぬ
鯷（ナマツ）魚の九尺餘もあるなであるを夫子見んとす
其ものちからまかりん音まで物老ぬれば

群乃精これによりて集る所の物六畜の物なる亀蛇魚鼈草
木の類にいたるまて久しくなれば神これによりて妖
妖怪をなすなりこれを是故五酉といふ五酉とは五行乃
あらゆる物にある酉といふ老たるものなり老ぬれ
ば時は怪をなすこれを殺せばなくなるとはいふことなりされば
られへむかふかくすまひなる（捜神記衛波詩よりみえたり六畜をさうらくたくふすなしほどふ）
そのかみ此気をすうして天より賜はりて神あやしく後の世乃人のうけたる　されは於のつから五行の氣をうけし
類は老ては怪をなす事あるのなかれのやうなり物
の老たるのとふしきかならず人の老たるも妖をなすもの
みや大原乃王仁裕る遠祖母二百餘歳をたもちたる

ちいさくなりて行方を絶て長ケ三四尺ばかりすぎて眼白く瞳碧みて傳飲食のものを知てみしまふらん夜をかくして行方をしらずまぼろしの如くなりたるまたにんしにまさるを補てもの人をまいづちへ去らもとりつくことを云夜一つの柳葉みかきて射しるのしるしにわかをもて所をたづねるに且拾出るんほをあひうばしかはふひきてもを云て来てむかはを来るしるをはのを孫ちをいはんをんけるをの孫の甲をきをめて牧母

百年余を酒ふ研ぎ祖母のおりをる沈て箱を

折ふきてをるふめしきある鉄の箸をきをつ
ぬをうををるをのをしををのを絶ふ帰を
まを沒と説測みを伝わ打ををらをの人すを
犯しをふ狐魅をのものをの形をいををんきをや
いを乃神仙の老だ死ずをきを一八多くはをの
道行をもの妄誕の説をわをいをををを芸をを
まをもふををふまを人妖をふをの人を本物乃
もを人変て天狗をいをものふをぬをいを傳ふ
ををを鬼仙をいをものをあをすやをいを人
もあをどいををなる人を世の傳ををををくを人の天狗

といふものゝたぐひハ修験の高僧のたぐひなるべし
或ハ佛教ハ上ハ鬼宿に屬するとみしるべし鬼星なりけ
れハ佛法おこなふに佛をすれバこそ一霊鬼あらはるゝ
事もと傳れハ尚書故実身すでに鬼道を行ハむ人ハ鬼の
ためおのづから接せらるゝこともあるべしやされバかの
ためしに似たる事もむかしハ多し唐の時蜀乃
國なる佛寺に大會を設けしにいろ〳〵の百戯有
しなかの中に十歳ばかりなる童男の一本に童女ともあり竿の上にて
さまざまの舞をなすさま人多くあつまりてこれをミる
うちにたちまち鵰くまたかのごとき物来りて飛去りけ

其竿のうへなる人大に驚き悲しミけるが暫く有て乃
後高き塔のうへにあがりたるを父母見つけてのぼり
なりしかバ登る事を得ずして暫くありて居
たる程にて人に抱きてありし後佛寺の塔に登りける
飛天夜叉のさまなるものかひつかみて此塔乃
うへに入らんと後日ハ身ハくさきもの食ひし飲食の招を
うらぎりてかひなしといひしかバ尚書故実にのせて候
飛天夜叉と佛書に見えたり鬼乃なかにて翼生へたる
ものなりや 佛書に夜叉ハ両の角ありて形の異なるものなり飛天夜叉をよく幻術をなすものなりといへり
いはゆる天狗の類なるべしよりて似たる例これらを多

くハ山林異氣の生ずるところ乃木石の怪なるべし
述異記にみえし山都述異録にみえし木客など
いふも此其かたちこそ物いひもすれ人のごとくにて
手足の爪鳥のごとく傍に山ねこのごとく髪けたちしま
ところ語ますれんてよく変化しその形をかへること
あれなるをといふこれら世にいふ天狗に似たり山姥と
いへるも嶺南の山姑に似て（河録雜事にみえたり）山魈といふハ日南
南丹等ハ地の野女野婆に似たり（野女ハ博物志野婆ハ斎東埜語にみえたり）
河太郎といふものハ宋の徐積が盧川の河乃ほとりにて
見たる小兒（鄭仲雜志ニ見）白澤圖にいはゆる封の類なり

海和尚といふものハ東海の海人がいふ所の僧のごとくにして
すこぶる大きなりといふに似たり（草木子ニ）猫またといふハ
もと金華の人ハ家に飼ふ猫三年ハ後ハよく人をまど
ハすといふの類なり（五雜俎ニ）犬神といふものハ尸子の地
狼夏鼎志の賈（二書ともに地中の犬なりといふ）白沢圖にいはゆる木乃
精を彭侯といふがごとき猶のぬしなどといふもの類
とはいへど犬をころしてみなもて妖術を施
なすことの事日南・蛮方の蠱毒の事に似たり（蠱毒ハ巫蠱の如くなる）
（してその毒を人にあたふることその外なほ蠱毒法の名あることも多しことごとくみえたる書ハ多なし）この事ハいやしくへ
よりてもなのむしみや周禮に庶氏ハ毒蠱を除くと述

はるさとれるふらしめんらへるを今そ世に外法を修する
人乃妖狐を役使するなりとも皆僧乃外術にして
巫蠱乃類なるへし世のおろかなるものもかきくを
狐魅をいつくしみて神となしまさに法の隠神
を御かるら蟒蛇（ヲロチ）にてましけるといひあさましき
なるをむかし狐をいつきまつりし社乃ほとりにて
狐を射ころせしものありその社司これをおほや
けにうつたへしにはは法まあるへしなりし大納言
経信の卿白龍ハ魚服せる豫且か密網にかゝれる
一ことはりありとて座を立給ひしとそいはれし事を

一けをなかさたれせらし白龍乃御すかたにて魚の
すかたに変しけるかなをあそびしを豫且といふもの
のさとらぬに射られて嘆きしを天帝にうつたへしに
魚ハもと射らるへきものなり豫且何の罪あるといふ
こと伍子胥か呉王をいさめしかのみせし言葉に出
けれは経信卿引きたまひしなるへし（説苑楚辞の注に出たり豫且）
かたちを射る事あやしきなれとこれハ狐なりしかのなき宏才乃人あつかふ事よりかくそいふなるへし そもとへはいふ神明そ
ましかれとも狐蛇乃形をなりかのひとあつかはん程するからん
狐蛇をそてなるへけれハ伝乃尊き事をなるへし
かとらか妖狐毒蛇の人をまとはし人をそこなひけんを

いにしへ聖人の理やまとしらの祀をいはん
みな淫祀といふべくんども国持ちてあり
すべて先王の祀典あり法ありてわる聖人
さるべき神をまつるものを淫祀と福
をもたらす曲礼出李氏の泰山を旅せしを夫子ほめ
たまひしむかしの理ことごとくあつまりて淫祀
古よりの淫祀多しかの唐の狄梁公その淫祀一千七百
区をこぼちて宋の時に夏乃禹伯子晉の二廟をのこ
弾ずかの寺唐書の本伝にすべて淫祀とあるを朱の注にうるはしきを祀るとあるを伯子晉
廟をとどめるわ[illegible]ハ[illegible]伯子晉を美国乃

地方にて祭る所々に楚国の地なれば家屋にて
伊川の程子論せしまことにまことにまことに淫祀
祈禱かなしすべて雪穢あることいとはやその神よく灵
なるをハたのまれいにまれ家人を精灵あるもの
なくて亡なるものの鬼神大王乃ごとき者なるを
むしろ安南の人田乃中の祖をもつまて麋(シカ)をもて
んとて屋ごとに蓄ひとりの祖のぬしいまさず
らさるをして道ゆく人のなるが麋をとて盗くを
さまたとえ人ぬすびとの[illegible]ものをあやまるとも
まんをほしとふとおもひくるの業乃かなわに

きとげきんおもしろ鹿奥ゑをを細乃中まいれて
おもしろきかうる和ゆうの細乃ねゝ来かて鹿奥の
あみ乃中にあるを見くこみの言よあふへし
ともおもへいうきゆふし現神乃ないをしさ務
まよこてあめふと大まあやゝせ村のものとて
みれよを集らくやゞ伝祠を建く入まんゝ務
鹿君と名づきまいゝせを村の者ともやまみを
くいゆるこあれだこみ序神乃あゞこみまやゝ
示ものとていたまれ鹿ゝ御社大きを作を
出ゝく賽の神乃(カヘリコトウシ)ものおもへ乃おもへ御社の

めでさき清神まで御わるる七八年ほど経てかの
鹿奥のあゝこの清社のほとりすぶていふ所る清
神乃かくあきあゝれさせまもいみふをのが
そゞゑん至ゝ鹿奥なりるあふなきまこをれを
こづゝゝがとゞめおもし物をといひをハかの天弦
の事ともきちち此ふる(拝ホ子マ)又芦浦といふを
るゝ人乃なるみとふくわをゞ同我ものて樹乃
枝をかけてるくあとよの事ある人きく見ら
こををはゞめすぎゝ人のこくに持く言我
過くる人皆かく乃こするほとみ後まをわら

くゝ乃負幾百千といふことを考へ何者の考へむれるゝ草鞋大きと石を題しゝ後みゝ貴み
神社をたてゝいつきまつる所ゝに霊異をゝ
ゝなるはる彼ゝ人ゝをすぐれ物ゝうのゝを聞ておゝしむるゝ
おもゝ誠をゝの慶はれるほゝものゝ死せゝうの
ゝ毎ゝものゝよゝまでゝ有ゝる五雑組
考ゝ乃道をもゝく世誠治むるときゝはゝの鬼神を
ゝ仮ゝとゝ信ゝをゝ拾ゝれ事をやいゝ毎ゝ南軒
張氏乃ゝゝの渭洞をゝ信ゝ慶ゝの神ゝ

隙すれ文めゝゝ乃頭ゝ球ゝれ使ゝ見ゝる
ゝ頭ゝ八ゝ頭の宮の名ゝ是ゝ乃頭ゝ球ゝれ使ゝ見ゝる
ゝ軟ゝゝ乃ゝれゝを乗ゝたゝけのせゝまゝゆく
ゝの洞ゝ入ゝゝの神乃像をとりゝゝゝるに
ゝれ服の中ゝ合ゝ乃ゝのゝに合ゝ
ゝ数ゝ是の後ゝゝゝ合乃中ゝ是大きゝ
白髪虫乃ゝゝ是ゝゝを取ゝて神ゝ入ゝ
ゝ後ゝ一つゝの虫ゝは是ゝ取ゝれ女郎の
ゝゝゝゝとゝ後ゝ金ゝゝ是ゝの類ゝ世ゝ
ゝゝゝゝ神仏乃像はゝゝゝ出ゝ修ゝ巫

祝乃類其地の産れるの性きはめて霊あるを
ちなみて像の中に鎮め置くその灵はたらきの
あるまれなるかの如しかるに其の頭の両脚の頼りしハ
ゆゑなきの神を却てうやまんとの乃いとあし其故
みるに如くなしまたまた神明まことにしと
おもふこころ陽くそで立ちたる金うわちて
紫陽の業ふるわらの事論してすべからく民
をして正道をよく理をよく信ぜしめ
穀ひかるるまむ後ちて初をば
つへをそ〳〵ぶハの民水旱ふる疫疫ふれ

神をよめてそいのりもとむるをちまちまつりこぼち
すてらるこんまいらやまひをまるものこころを
除うるんきむ〳〵に里の人物のくるつとみ
土をもつて造るふる大仏乃像なるとある人乃
首をきりて置しかるる所のものとあいまつて
信くあるの像の首よりを舎利おろくとてのの
土よいうでそれらのものをはすへきぞこれ人のこ
乃いうこそとうちなりいつ角をるる事こそ
おほゆるこころ〳〵淫祀の鬼神乃外に灵ありこと
あるをいうをあるをハ忠臣義士の死〳〵くるの霊

魂魄いかゝなるものなるかを知らんと
法民ほどこゝに死をいかゝ事を法とせん所を以
て國を定めよゝ大なる苗を始せばなく大なる
患をふせぎ〳〵ふかの人なて世御国まして八国を
ふまんべき所の一四施となすあるたゝ八今御母
ほのるも又位祀やいかゝ尊なるの佛を西域の
化人なりかるをふかの〳〵天地あゝ墨は
じゝを　天照大神乃御すゑ八豊葦原の中は
國をゝしまさんしまるこのゝ世にいつきまん
ゝ〳〵ん給ふ御神をゝん祀典ゝ伝る　神名帳ゝ

他方くゝの神まつるゝ伝るみ理かゝや今も伊
勢ゝ伝尼をは山も事ゝ伝るをゝといゝ
ゝの大学寮をはじめて國ゝも先聖先師を
つゝほれ伝ゝ寄らハ其法式奉する伝尼乃御母
ほうふまつんこゝふあゝ世のつゝの人ゝ法
たゝふるこゝふをゝ社おゝふゝをゝおゝく
祈禱のをゝふゝ世鬼をなゝ伝ゝ
ふるゝ尊ゝ義をゝて世ゝ八勇ゝと
伝るの民の義を求む鬼神と敬して遠ゝく伝
ゝかをゝ通しゝ此すゝひハゝけぬゝし

おのゝ行ひ乃善ゝぬゝかゝを惡ゝとゝゝん
ゝゝゝいゝゝゝゝてゝゝ罪まぬゝれむとおゝゝ
ゝゝ佛ゝゝはゝゝまあのゝれとゝひゝゝゝゝゝゝ
民の義をはゝもゝることゝゝゝゆゝなゝゝのあや
まゝを悟ゝてゝすゝゝゝに改ゝることゝゝゝゝゝゝ勇
ゝくゝゝて義をゝゝてゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ又
佛乃悲願ゝゝまて六趣の輪廻とゝゝゝゝゝゝ
九品乃快樂をゝゝうをゝんとおゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝまゝゝゝき祖考の神ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
禮を尽ゝゝゝゝゝゝゝゝ親ゝ孝ゝゝゝゝゝ權勢

の人ゝ媚ひ諛らひて身をも我をもとゝゝゝゝゝ
人ゝ似ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
きゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
の化人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝの感應ハゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
家ゝ祖ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
どゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝくゝ人の禍をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

三世の事を說き法つるこそまことにすぐれたる教
人の不幸あるを前世の惡報なりと此理をはぐなひ
てんみは後世ハかゝる次善報をうく屋なものあり
あしき人も前世の修善ゆゑにかくこの世に
幸ハおろかなるの善報乃すでに尽なん後ハ後世の
ら地獄道に墮ちへきものとなりいとあること小きれる
ばかりて大なることをすなはち說きるべき福善禍淫
の事ハ天乃ゆゑ理あるハあれとこれ
ゆゑにいふ聖人只のいとゆゑ乃ハ亦
みてこれを真なりとして實なる世理ハ知ることなく似ま

これハ易なる善不善ゆゑに積むなりはみえこの家とえ上
ハ父祖のかの下は子孫ゆゑ中とあの身壽と伯叔
兄弟とゆゑに通じくいふる名なるへきこゝにはかるいふ
所ハ三世といふ世法なたゞあの一人なる聖人乃
實ことなたゞ上中下ゆゑ千百世といふやうなたゞ
初のゆゑ家ゆゑあるいはへなるを家をゆゑ世代
人の先をゆゑ世信の人なるをまことに人のゆゑ孫裏
ゆゑいはこと同ゆゑ世の人知ゆゑ慮近して家
百年の間ゆゑ世のうちの事のことをもつてかの天命を解ふ
こゝろこゝろをもつて積むこのゆゑ百人の事なきこゝろ

なるべしやたとへ人の生れづき一二の大善をなすとも
むかしその善いかほど大なりとも積ることあるべからず人の福を
いたすに及ぶべからず善かるべくせざる事なれ
ども行はれざるべからざる故に我法をもちひつべく
天福をもいたすべしぬ人の己が身を上にしかるべ
いたる前世のてつからいかゆる後世のわざの
ガいかほど善なりとも祖先の世を恐を積るむかしの
餘殃あるべきなるべしあるべきなるべ
のつもりひとまとめにあるべし如人の福あるべ
きなるべし祖先の積もりの善力餘殃なるべし人まき

とまるべ天定まりて人みづから作るべ力
ようのべぬ人いたるべ小人なるべ小人へかるべ
ずあるべ世べ媚ひべ人ほべ

人を治る事を先に務んべ
の世の人をや人に作る人に作る人多
しのわるべ人れわる為なるべ
あにべ貴あるべ能あるべ
違ひべ用ひべ事ぞ治るべ人多くして天
変べものべいたる百年べ公議べ
ほべ又人を欺べ人の生けるときはよきつけ
べ人のべ業伝しかべ

あはれ人共敬ひうやまふ事のうるはしく百姓の仮ごころの強ハけなる教ハ人乃子孫をうれ[illegible]ていつの世にハなかりしなり天さ[illegible]て人をあはれむこゝろばかの稜者の教なり仏乃稜不善の家に殃あり[illegible]事伝ふ

あやまりへきらの仏乃教ハ孝行乃父母をそむき妻子をすて求むべき道にかゝるもの[illegible]おろかの事うれたの[illegible]身をうつを利せんとするをうはあたゝ善となして殃とあひ更ぬちうて福をうるゝことにおほきなかの家世法世乃說をきゝて[illegible]仏乃教ちはるもみあか

かれ[illegible]の教を人のせにあをかのいふのごとくすでに鬼をうるゝおそれて始く扇羅十五年孔獄をうるの事をまのみあり漢唐よりのせ法記せる史傳ハ西域の人をうみ性もつとも忍べきの読ゝ奇きものをいふ人乃所謂鬼方ハ地ふれハ世俗ハ鬼を信を性忍るものハ父子乃あをけをうるゝ利をもむくこいうるうてハいうでる父祖をうるゝ子孫をうる福せんちを祈あらまとハ[illegible]人乃孝鬼を信るものハ同じ三次再ふ仏へうるものを怖るゝの仏乃はをて表

を設けて導きもてなす（二世因果六道輪廻の説をもてしるべき）
なり。されどその志のときに仁
あるものなる人のこれ嗜方
便の法なりて則衆生を度せんとおもひ
[illegible]をもつて人を救せ[illegible]
いくばくの妄をもちゐるとを得へし程氏のいはく
正しく大病をなすとは[illegible]だ醫の庸なる
ぶ病を治するとそのこれをなすにこの病を
医せんとおもひてこれを良医のめきくるあるをまず
苦しむと毒なしといへる事をよくこれをゆるす

かの金ちん法この等の毒のこれを占ひて舊疾を
でふいゆることを得るとも新病まさに発するもなかぬ
へきとおもひてその方を按する事をやすめ医其弱
をなるときはこれをあらし業乃ち化
とこれを功あるまおよそ仍これつけとるの病
毒なるを及んでハいくばく芸術拙きをもて病をは
主ときこれを治しぬこのくすりの毒久しくして農
せんと試みるその毒発するおそれをハ狂こと
なるこれ法しやまひとハ醫のほどもなること
をすまずしてこれ病をやらみくるの毒もてで

我しらんとハ孔子いふ情らすなくとも孔子きや
如の俗のおしへ[illegible]ふ[illegible]て世俗を導みて善を
修せしめんとのおもるゆゑなりとの教をと
実教をて君臣あくに父子をおくまして夫婦兄弟
乃おしえもあらんそ[illegible]自然をつを利せんとのこ
ゝろ[illegible]ゝろを善をおこなんとすれハ世にいるゝ
所をたされハいろ〳〵へをを佛ゝ僧すれ人大世ある
の人なるまたて必す信恵あるの人なゝ[illegible]ざれ
ばいてもる異邪のるゝきゝるをてゝ[illegible]ゝる
求めなるゝをを行ふものなを中庸ゝ[illegible]ハ邪の

るゝき行のるて世乃道を厭ひしものこゝろ従を
ゝをゝるに常の飲食を節ゝ[illegible]の起居と
叶ふすることは聖人ハ生を養ふ物の道なる故
ゝらハ世の中ひなかとひすて〳〵ゝ
不をのこ殺ゝるゝ[illegible]いゝ[illegible]殺業ハ人
恩ゝ[illegible]ゝ毒害〳〵命ををせ上を天ゝ
下ハ士農工ゝ[illegible]ゝ数をゝ[illegible]世の
仏[illegible]ありて拙ゝふハ〳〵変ゝ[illegible]ゝる人多
ゝふものゝ法[illegible]をいゝ[illegible]人ゝ聖人乃ゝ[illegible]ハ
ゝはゝゝ蔵栗布帛乃ゝ[illegible]ゝ[illegible]

孝弟忠信の外ことに詩書礼楽のごとき
ものは雅言宜しきものにして力の怪力乱神のごとき
語ることなかりしなり

鬼神論 下 大尾

明和庚寅冬御免
寛政庚申秋出版

高麗橋通 藤屋彌兵衛
心齋橋通 河内屋太助

大坂書舗